**降誕前第5主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年11月24日**

**「迷い道」**

**詩編122編6～7節**

**122:6 エルサレムの平和を求めよう。「あなたを愛する人々に平安があるように。**

 **122:7 あなたの城壁のうちに平和があるように。あなたの城郭のうちに平安があるように。」**

**使徒言行録21章17～26節**

**21:17 わたしたちがエルサレムに着くと、兄弟たちは喜んで迎えてくれた。**

 **21:18 翌日、パウロはわたしたちを連れてヤコブを訪ねたが、そこには長老が皆集まっていた。**

 **21:19 パウロは挨拶を済ませてから、自分の奉仕を通して神が異邦人の間で行われたことを、詳しく説明した。**

 **21:20 これを聞いて、人々は皆神を賛美し、パウロに言った。「兄弟よ、ご存じのように、幾万人ものユダヤ人が信者になって、皆熱心に律法を守っています。**

 **21:21 この人たちがあなたについて聞かされているところによると、あなたは異邦人の間にいる全ユダヤ人に対して、『子供に割礼を施すな。慣習に従うな』と言って、モーセから離れるように教えているとのことです。**

 **21:22 いったい、どうしたらよいでしょうか。彼らはあなたの来られたことをきっと耳にします。**

 **21:23 だから、わたしたちの言うとおりにしてください。わたしたちの中に誓願を立てた者が四人います。**

 **21:24 この人たちを連れて行って一緒に身を清めてもらい、彼らのために頭をそる費用を出してください。そうすれば、あなたについて聞かされていることが根も葉もなく、あなたは律法を守って正しく生活している、ということがみんなに分かります。**

 **21:25 また、異邦人で信者になった人たちについては、わたしたちは既に手紙を書き送りました。それは、偶像に献げた肉と、血と、絞め殺した動物の肉とを口にしないように、また、みだらな行いを避けるようにという決定です。」**

 **21:26 そこで、パウロはその四人を連れて行って、翌日一緒に清めの式を受けて神殿に入り、いつ清めの期間が終わって、それぞれのために供え物を献げることができるかを告げた。**

1.

**私たち人間というものは新しいものが入ってくるとすぐそれに飛びついて順応する人もいますが、多くの人はどうしてもそれまでの習慣であるとか生き方に縛られて、それまで大切にしてきた習慣や生き方を捨てることはなかなか難しいのではないかと思います。例えば、私たちが新しい土地で新しい生活を始めたとします。それまでの生活習慣が抜けなくて、つい今までの習慣で物事を考えて行動してしまうのはよくあることです。それが自分だけならいいのですが、周りの人たちに古い習慣を押し付けてしまうとそれはトラブルのもとになってしまうものです。新しい職場でそれまでの古い職場のやり方を押し付けようとする「私は今までこのやり方をやってきた。だからあなたもこのやり方をやって欲しい」と主張するとお互いの主張がぶつかってそれは大きなトラブルになるというのはよく聞く話であります。体になじんでしまっている古い習慣はなかなか抜けないものであります。**

**18：23から始まったパウロの第3次伝道旅行は本日の聖書箇所のエルサレムに到着して終わりを迎えました。第3次伝道旅行は紀元53年ごろから58年ごろにかけての5年間。距離にして陸路・海路を合わせて3000キロ以上あると言われています。距離としては第2次伝道旅行には及びませんが、期間は3回の伝道旅行の中で一番長いものです。**

**その5年間に及ぶ伝道旅行で様々なことがありました。私たちの記憶の新しいところでは、パウロが3年間伝道に励んだエフェソでの騒動がありました。アルテミス神殿の模型で生計を立てている人たちが、キリスト教という新しい教えが入ってきてそれを信じる人たちが増えると自分たちの生活が困ってしまうので言いがかりをつけて騒動を起こしたというものでした。彼らは異教の神を信じる異邦人でありこれは生活が懸かっているから余計にそうですが、古い習慣に囚われて新しいものを受け入れない人間の姿と言うことができるのではないかと思います。**

**しかし多くの異邦人はパウロが語る新しい教えである、イエス・キリストの十字架と復活の恵みを信じるだけでユダヤ人も異邦人も関係なく誰でも救われることを信じて受け入れてキリスト者となりました。**

**むしろ、難しいのはユダヤ人の方です。それはパウロが第3次伝道旅行だけでなく伝道旅行で各地を訪れた際に多くのユダヤ人から迫害を受けたというのがまさにそうです。神様の律法を守ることを大切にしているユダヤ人からすると、イエス・キリストの十字架と復活の恵みを信じるだけでユダヤ人も異邦人も関係なく誰でも救われるということは受け入れることが難しいのです。自分たちこそが神から律法を与えられた神の民イスラエルの民であると自負するユダヤ人の選民意識と言いましょうか、神様から選ばれた民が汚らわしい異邦人などと一緒にされては困るわけです。**

**ですからパウロの伝道旅行は多くの異邦人が信じて救われるという恵みがありましたが、それと共に多くのユダヤ人から迫害を受けるという、同胞のユダヤ人であるパウロからすると何とももどかしい思いもあったと思われます。**

**そういった思いを抱えながらもパウロはエルサレムに到着しました。パウロのエルサレム行きは聖霊に促されたものであり、「主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです。」（21：13）と強い覚悟を語ったようにパウロはイエス様のために死を覚悟してエルサレムに到着をしたのです。**

**エルサレム教会はパウロたちを大きく歓迎してくれました。この時のエルサレム教会の指導者であるヤコブ（彼はイエス様の弟のヤコブです）と長老たちが集まって会議をしていたようです。そしてパウロはそこで第3次伝道旅行での恵みを報告しました。多くの異邦人がイエス様の十字架と復活の福音を信じてキリスト者となったその恵みを報告したのです。それは他でもない神の御業であることをパウロは熱く語りました。**

**教会の人々は神様を讃美しました。「なんと素晴らしいことか」と神様を褒めたたえたのでした。と、ここまでは良かったのです。この後ヤコブと長老たちはパウロが全く思いもかけないことを口にしたのです。**

**それは、多くのユダヤ人がイエス様の十字架と復活の福音を信じて救われた。ユダヤ人である彼らは律法を熱心に守っている。それに対してあなたはユダヤ人たちに『子供に割礼を施すな。慣習に従うな』と律法など守るなと教えているという噂が流れている。**

**「だから、わたしたちの言うとおりにしてください」とヤコブたちはパウロに言います。日本語では優しい口調で提案しているようですが、元の言葉では「だから、私たちの言う通りにせよ」と強い口調の命令です。「私たちの言う通りにしなさい」とさも自分たちが正しくてパウロが間違ったことをしているかのように命令するのです。その命令は民数記6章に記されているナジル人（びと）の誓願を立てた4人を連れて行って一緒に身を清めてもらい、その費用を出せというものです。そうすれば、その噂は根も葉もない噂であり、パウロが律法を大切にして固く守った生活をしていることを証明するというものです。**

**ここで私たちが注目したいのが、これがキリストの教会であるということです。エルサレムの教会はペンテコステに聖霊が降って誕生したキリストの教会です。イエス様の十字架の死と復活によって私たちの罪が赦されて救われて永遠の命が約束されている、その大きな愛と恵みに立ちまた生かされているキリストの愛が溢れる教会です。ペトロたちがユダヤ教のファリサイ派や律法学者たちに捕らえられた時に、皆で心を一つにして熱心に祈った祈りの共同体の教会です。財産を持ち寄って分かち合い一人も貧しいものがなかった、互いに愛し合い、互いに支え合う愛に満ちた教会です。**

**その教会が今日のこの姿を見るとまるでユダヤ教のファリサイ派や律法学者の会議のようです。使徒たちが捕らえられて「あなたは律法を無視している」と言いがかりをつけられて「律法を固く守るように」と厳しく要求されている姿のようです。ヤコブたちの言葉には「イエス」も「キリスト」も出てきません。出てくるのは「モーセ」と「律法」です。これではユダヤ教の集まりと言われても不思議ではありません。**

**ここで問題になっているのは律法と福音です。かつてアンティオキアの教会で律法と福音が問題になり、それがアンティオキアの教会では埒が明かなくなりエルサレムの教会に持って来て会議が行われたことが15章に記されています。それは異邦人が救わるためには割礼が必要、つまり律法を守ることが救いの条件か否かでユダヤ人キリスト者とパウロは激しく対立したのです。エルサレム教会はこの問題で主の御心を祈って協議ました。その時ペトロはこう言いました。15：11です。**

 **「わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じことです。」イエス様の十字架と復活の恵みによって救われているのはユダヤ人も異邦人も同じだ。神は分け隔てなさらない。そして、エルサレムの教会は、異邦人は律法を守ることが救いの条件ではない。割礼は必要ない。ただ、ユダヤ人が避けていることは異邦人も避けて欲しい。お互いがお互いを配慮し合ってほしい。それが決議事項としてアンティオキア教会に手紙に送ったのでした。**

**この律法と福音の問題は異邦人については解決した問題でした。そのことが今日の個所の25節で記されています。しかし、ユダヤ人についてはこれまで大切に守ってきた律法をこれからも守っていくことが大切だ、という認識がエルサレム教会の中にまたユダヤ人の中にあったのでしょう。15章のエルサレムの会議でもユダヤ人の律法の問題は話し合われませんでした。**

**でも、考えてみればそれはおかしな話です。ユダヤ人は律法も福音も大切で、異邦人は福音だけが大切。ユダヤ人と異邦人は何か違うのでしょうか。同じ罪ある人間です。神様はユダヤ人も異邦人も分け隔てなさらないのです。イエス様はユダヤ人の救い主だけでなく異邦人の救い主、私たち全世界の人々の救い主です。先ほどのペトロの言葉にもありましたように「イエス様の恵みによって救われているのはユダヤ人も異邦人も同じ」です。エルサレム教会はこのことを分かち合ったはずでした。しかし、今日の聖書箇所を読む限りではそのことを忘れてしまったかのように「ユダヤ人」「モーセ」「律法」とユダヤ人が救われるためには律法を固く守らなければならないと古い習慣に縛られているようです。まるでイエス様の十字架の恵みがどこかにいってしまっているかのようです。そして、自分たちが古い習慣に縛られるだけでなく、パウロにも律法を守るように命じているのです。「あなたは間違っている」「私たちの言うとおりにしなさい」**

**「迷い道」これが今日の説教題です。私はエルサレム教会の姿がまるで「迷い道」を進んでいるかのように思いました。救われるのにはユダヤ人も異邦人も関係ないのに、そしてそれを分かち合ったはずなのに、ユダヤ人は律法を守らなければならないと律法に重きを置いてしまってユダヤ教へと後戻りをしてしまっているのです。これまでの習慣にしばられて、前に進めないのです。いやそれどころか、、3歩進んで2歩下がる、よりむしろ2歩進んで3歩下がるかのように、後ろに下がったりして、永遠の命に続く救いの道は一本のまっすぐな道なのに、迷い道をくねくね歩んでいる教会の姿が思い浮かびました。**

**そして私たちの信仰の姿もエルサレムの教会に似たものがあるのではないかと思います。前に進んだと思ったら後ろに下がったり、それまでの習慣に縛られて「こうあるべきだ」と人を裁いてしまったり。「あなたは間違っている」「私たちの言うとおりにしなさい」とさも自分こそが正しくてまるで自分が律法であるかのようにふるまってしまうこともあるのです。それはせっかく神様が用意して下さっているまっすぐな道であるのに、「迷い道」をくねくねと歩んでいるようなものです。**

**パウロはそのような「迷い道」にある教会の命令に何の反論もせずに従って清めの式を受けました。15章ではアンティオキアの教会での異邦人の律法と福音の問題では激しく意見を論じたパウロですから、今回も同じようにしても不思議ではありません。しかし、今回は何も言わずに従いました。なぜパウロは黙って従ったのでしょうか**

**そのことがよく分かる聖書箇所があります。**

**コリントの信徒への手紙Ⅰ9：19～20（311頁）。**

**「9:19 わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。**

 **9:20 ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。律法に支配されている人に対しては、わたし自身はそうではないのですが、律法に支配されている人のようになりました。律法に支配されている人を得るためです。」**

**さらに23節にこうあります。**

**「福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。」**

**パウロが律法に支配されてしまっているエルサレムの教会の命令に反論することなく黙って従ったのは福音のためです。自分自身が律法に支配された者となることで、律法に支配されてしまっているエルサレムの教会が過ちに気づきイエス・キリストの十字架と復活の福音にしっかりと立ってほしい。迷い道にある教会が、今自分たちが迷い道にあることに気づいて欲しい、そしてイエス様の十字架と復活の福音に立ち帰って欲しいとの願いを持って黙って従ったのではないかと思うのです。パウロのこの姿も黙って十字架への道を歩んでいかれたイエス様のお姿に重なるものがあるのです。**

**ここで大切なことは気付きだと思います。今私たちが迷い道を歩んでいることに気づかされることで、「わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じことです。」（15：11）このペトロの言葉、すなわちイエス様の十字架と復活の恵みの福音に立ち帰ることが信仰の歩みにおいて大切なことなのです。**